

アフリカの子どもたちの食生活

外国語学部英語学科3年 洪井亜美

皆さんは、賞味期限が1分でも切れた食料がどうなるか知っているだろうか。日本では当たり前のように、その食料を捨てる。大学に入って、初めて経験したカフェのアルバイトで、その光景を目にして何だか心が痛んだ。ついさっき焼いたばかりのパンでも、お店が閉まると同時にゴミに捨てなければいけないという規定がある。サラダやケーキ、サンドイッチに入れる具材なども同様、賞味期限が1分でも過ぎたら捨てなければいけない。本当に食べたら病気や腹痛などになるのかというと、そんなことは全くない。私のアルバイト先の商品だったら賞味期限が切れたパンは、あと3～5日経って食べてみても全くもって平気である。日々、わあついのアルバイト先の店舗内だけだと大体10～25個くらいのパンが捨てられているのだが、このパン1つでも喉から手が出るほど欲しくてたまらない子どもが、一体世界にはどのくらい存在するのだろうかと考えてみる。このひとつを食べることで、何日か生き延びることが出来るなら今すぐにでも届けたいと思う。それと同時に、私のアルバイト先のように、まだ食べられる食料を何事もなかつたようにゴミに捨てている店舗は世界にどれだけあるのだろうかと考えてみる。私はたまたま、前者の少し古くなった食料をゴミのように扱う国に生まれ、後者のように地球の裏側では食糧難や飢えで苦しんでいる人がいることを知ることができた。しかし、食糧不足の国の人々が、食料をゴミのように捨てている事実を知ったら・・・と考えてみると、申し訳なさやもどかしさでうまく言葉にならない。

今、私は大学に通える年齢まで、諸苦慮運何不自由なく生きることが出来た。しかし、世界中には20歳を迎えることも難しい子どもたちが大勢いる。食糧不足による飢えとそれに関する病気や、栄養失調によって私たちと同じ年齢まで生きられなかった多くの子どもたちのことを思ってこの論文を書きたい。